

# ビキニ被災 室戸の会（仮）

## ニュース

2020年3月6日 No.30

発行「ビキニ裁判」を支援する室戸の会（準） 太平洋核被災支援センター

連絡先 事務局 宿毛市 088-066-1763(山下) 室戸の会 0887-35-8725(濱田)



## 「第7孝栄丸」を尋ね歩いて

昨年11月から12月に「第7孝栄丸」の元船員さんを訪ね歩きました。

第7孝栄丸は、1988年に室戸岬の船員さんの調査をしたときに大変お世話になった谷祐利さんが漁労長をされていた船です。谷さんからはいろいろとお話を伺い教えてもらっていたので、いろいろと分かったつもりになっていましたが、肝心の当時の船員さんたちのことについてはほとんど調べられていませんでした。改めて調査し、整理してみました。まだ、途中ですが紹介します。

遺族の方も含めて7人の方にお話を伺うことが出来ました。

- ・Nさんは、認知症で施設に入っているとのこと、数年前には前立腺がんも患ったとのことでした。奥さんが対応してくれました。
- ・Sさんは、何年か前にもお話を伺っていました。当時、港ではガイガーカウンターを当てたということを知っていると話してくれました。
- ・Eさんは15年くらい前に胃がんを患って亡くなったということ、近所に住む弟さんが話してくれました。その弟さん「いろいろ調べてもいかんぜ、昔のことやし。裁判もごっちり負けいうやないか。」とエールをいただきました。気にかけてくださっているのだと元気が出ました。
- ・Mさんは、足の具合はよくないのを押して、当時船の様子をいろいろ話してくれました。大きな船になって「清潔になった」という話は、とても印象的でした。
- ・Oさんは2005年に亡くなっていました(76歳)。奥さんが「もう、話をしてもいいのでしょうかね」といって話して下さったのが印象的でした。日ロ漁業という会社の船に乗っており、航海が長かったので、短いものにしてほしいと頼んで、室戸の船に乗り換えることになりました。そののちに事件が起こりました。ビキニのことはあまり話をしてこなかったということでした。ガンの発症はありませんが、脳梗塞と、パーキンソン病を患ったということでした。
- ・局長のHさんについては、室戸市内にお住まいの娘さんに話を伺いました。ほとんど、話を聞いていないということでした。岬の他の船員さんのおうちに行って遊んだ記憶があるということでした。平成25年に亡くなったということでした。

## 1954年3月当時の操業場所

当時の第7孝栄丸(125t)の操業地点について、3月20日付の高知新聞には「県水産課の調査によるとビキニ環礁で水爆(?)実験が行われた3月1日当時、本件のマグロ漁船四隻が爆心地からほぼ250マイル(第5福竜丸は90マイル)以内の海域で操業中であったことが明らかとなった。これは室戸及び室戸岬漁業協同組合所

属の第5海福丸、第7孝栄丸、第7大丸、第2幸成丸であるが、当時の位置は別図の通りである。」(高知新聞 昭和29年3月20日)と報じられています。

また、谷さんの手帳には「・3/1 N29.30 W186.3 ミッドウェイあたり ・3/2 N29.23 W188.22 ・3/13 N11.30 W171.30 ・3/22N10.40 W172.34」と記されていました。最初はミッドウェイ海域で操業し、そののちマーシャル海域に南下して操業したということがわかります。これは、第5福竜丸と同じようなコースをたどったということになります。

**谷祐利さん** ※1988年にお宅に伺った時に話してくれたものです。

「データならなんぼやち提供しちゃう。うちの船はその年(1954年)の2月28日から3月14日の間に12回操業している。28日は西経168度・北緯29度35分で3回。次は西経171度30分・北緯11度16分で……。しかし、残念やったね。先生らは遅かった。昭和29年30年の時にこのことに注目してくれていたら良かったのになあ。当時の先生たちは勤務評定がどうかでストライキをやったりしていた。それはそれで大事なこともかもしれんけど、わしらにしてみたら、このビキニのことを調査して欲しかった。3月5日には、第12高知丸は東経176度37分にいた。これは無線情報だ。3月8日には第15勇昌丸は東経178度・北緯9度45分に、白鷹丸は西経177度27分、北緯6度43分。近くにおった船はこんなものかな。わしらは、「潮上り」といって、縄をあげるたびに東に上がっていた。」

※谷さんのお話はまだまだ続きますが、あとは「ビキニ核被災ノート」をお読みください。

## Mさん(室戸岬町)

- ・昭和29年、ビキニの時、航海中に局長がラジオを聴いていて、ビキニでの実験のことを話していた。確か、福竜丸が先に入っていた。そういうことをちょっと話していた。
- ・浦賀には船員組合の事務所と船主組合の事務所があった。
- ・港は、東京、築地。
- ・中学を出てからすぐに船に乗った。それしかなかったし、船に乗ったらご飯を構えてくれる。
- ・当時、調理は重油を使ってご飯を炊いていた。その前は木をくべていた。
- ・当時の、木船から大きな船になって変わったことは、(しばらく考えて)衛生的によくなったね。
- ・奥さん-「あんた、なかなかしゃれたことを言うね」
- ・船は、定年まで乗ったよ。最初に乗ったのは大鵬丸で、最後も大鵬丸。・・・さん所の奥さんが、「船は若い人だけじゃいかん」といって、「乗ってくれ」といわれて乗った。
- ・奥さん-大鵬丸、第5長久丸、第3大徳丸と乗って、その後、和丸に乗った。和丸は、うちのお父さんがやっていた船。
- ・奥さん-これまでは大きな病気はしていない。昭和50年ころに盲腸で高知の病院に入院したことと、けがをして帰ってきたことがあった。ただ、若い時から歯が悪くて、早いうちから入れ歯にした。
- ・奥さん-娘が室戸高校の時に幡多に行ったりして、ビキニのことも勉強していた。今はもう50歳。Mひろみといいます。
- ・奥さん-船員同志会は、この人の妹が長いこと仕事をしていた。2~3年前に亡くなった。

## 途中経過ですが

第7孝栄丸は、当時25人が乗っていたと思われます。その中で、乗船記録と病歴をつかむことが出来たのは8名です。そして、ちょっと辛いですが、5名が「ガン」を発症していました。聞き



取り調査はもう少し続きます。

第7孝栄丸は、その後どのようになったのか調べた記録がありましたので紹介します。

## 『船の一生』 ※小説風に

第7孝栄丸は木造船だったが、当時としては最高水準のもので、谷さん自身が、それまでの船を分析・改良し、設計もしたというご自慢の船だった。

「第7孝栄丸はどうになりましたか。」

私は床の間に飾ってある模型を見ながら尋ねた。

「あの船はだれかに売ったのではないですか？」

「どうやったかなあ。」

谷さんはしばらく遠くを見るようにして考えた。

「そういえば、なんとかいう仲買がきたことがあったなあ、えーと確か明治漁業とか言って、九州か福島やったと思うけど。」

私たちはその話を聞いて、明治漁業という会社を探すことにした。まずは、漁協に行き尋ねた。職員の方が名簿のようなものを持ってきて探してくれたが、どうも見当たらない。次に、船主組合に行ってみたがそちらも同じことだった。

考えてみると30年前のことである。記憶そのものも確かかどうか分からないし、確かだとしても、その明治漁業そのものがどうなっているのかもわからないのである。どのように搜したらよいかと思案しながら港の上を歩いてみた。そういう目をして港を歩いたことがなかったので分からなかったが、港周辺には、結構いろいろなものがあることに気がついた。赤茶けたディーゼルエンジンが草むらに捨てられていたり、マストのようなものがあつたりするのだ。それらは、今活躍している船を見守るようであり、何かを語りたげである。

私たちは電話案内で搜すことを思いついた。九州や福島の漁港をもつ主な町の番号案内に照会してもらおうのだ。さっそく島田さんの住宅に行きダイヤルを回した。九州は広すぎるからまず、福島の港を地図で探した。「どうもここがくさいな」などと目星をつけるのだが、そう簡単に見つかるはずがない。2回目の電話したのは小名浜だった。

「ちょっとお尋ねしますが、明治漁業の番号はありますか。」  
私は期待せずに事務的に聞いた。どうせ分からないに決まっているのだから。

「しばらくお待ちください。」

交換手が事務的に言うのを聞きながら、次の港を搜していた。

「お尋ねの番号は……です。」

えっどうということ？私は慌てて鉛筆を持った。

「驚いたなあ、在ったよ。明治漁業というのが。」

私たちは興奮を抑えるのに少し時間がかかった。お茶を一口飲んで、それから明治漁業のダイヤルを回した。

私は何だかとてもない所に電話しているような気がした。それは、私たちの生活とは全く違ったという意味であり、なんだかこの電話は30年前につながっているのではないかというようなかんじであった。電話に出たのは事務員風の女性であった。事情を説明すると社長は今ここにはいないので、自宅の方に電話してほしい、とのこと。社長さんの名前は、金成さんというらしい。こちらでは随分珍しい名前である。自宅の電話番号を教えてもらい早速電話してみた。電話に出たのはこれまた女性であった。「ちょっと分からないので調べておきます」とのこと。何せ、30年も前のことだからあたりまえである。日を改めてかけ直すことにした。



(第7孝栄丸の模型)

それにしても、明治漁業をこちらで調べてもないはずである。その会社は遠洋漁業ではなく北洋漁業をしていて、日鯉連には所属していないのだから。2, 3日して、私は金成さん宅に電話してみた。

「先日お電話した室戸の浜田というものですが。」

「ああ、高知の、調べてみしたよ。主人に聞いてみると、そういえば、確かにあったようだ、とっていました。」

「そうですか、やはり。そ、それで、今はどうなっているんですか。」

「それがですね、30年ぐらい前に買い取って鱈船に改造して、2, 3年使っていたんですが、どうも沈んでしまったようなんです。」

「えー、沈んでしまったんですか。」

私は一気に気が沈んでいくのがわかった。お礼の一言をやつと言い受話器を置いた。しばらく、ボーっとしていたのだが、なんだかとっても悲しくなってきた。

私たちは当時の被災船がどこかに残っていないかと探し回っていたのだが、この第7孝栄丸のことを調べているうちに『船の一生』とでもいうようなものを感じたのだ。被災船というのは単に漁船が被災したというだけでなく、その船の一生の中でものを捕らえないといけないと。そのように考えるならば、なんと短い一生だったことか。あたかも、被災したことがその一生を狂わせたかのようである。

当初の目的からすれば、船は既がないことが分かって、それで終わっていいのだが、わたしは、この第7孝栄丸がいったどのような原因で、どのような最後だったのか、それは北洋のどこだったのか知りたくなって金成さんに手紙を書くことにした。

1週間ばかりたったある日、金成さんから手紙が届いた。

『お手紙拝見させていただきました。先生のご熱心さに胸を打たれ、早速小名浜の海運局へ問い合わせしてみたところ、同封した報告書をコピーして頂くことができました。第7光栄丸の船長の阿部三男氏も今現在は住所も変わられて、調べるのに容易ではありませんでしたが、電話番号で知ることができ、一応話しておきましたので、この他にお聞きになりたいことが在りましたら、電話をかけてみてはいかがでしょうか。』

私は目頭が熱くなってきた。わざわざコピーをとってくれたり、元船長の住所まで調べてくれたりしたのである。金成さんの手紙に同封されていた報告書には次のように記されていた。

#### 《事実の顛末》(要点のみ)

昭和38年1月24日 t、17h10m、N45-01 E155-58 本船は昭和38年1月8日11時50分…出港北上し、(中略)1月16日17時漁場到着後1月23日16時頃7回目漁を終わり。同月23日19時10分ごろ次の操業準備のため、機関停止中の処、突然19時25分頃機関部船底付近より浸水がありました。船員一同にてあらゆる手段を施すも北太平洋の荒波と浸水の激増のため全く手のつけようなく沈没は免れない状態になったので付近航行中の第1富佐丸に全員移乗し本船の状態を見守る中で、24日17時10分沈没した。(以下 略)。

私たちの捜していた船は、海の底だった。ビキニ水爆の証人となりえないことの残念さはもちろんだったが、調べていくうちに何だかそれ以上のものを考えさせられる思いであった。それは静岡で生まれ、土佐で命を吹き込まれ、南洋に踊り、そしてオホーツクという北の海に沈んでいった船の一生にドラマを感じたのだった。

(「あなたは静かに語り始めた」濱田 1989 より)

コロナ対策で調整中の案、対策含め、検討のうえ、3月18日決定、通知予定  
**核被災フィールドワークと検証会(案)**

3月29日 ・フィールドワーク

14時~16時室戸漁業会館2階

3月30日 11時~12時高知城ホール2階

・検証会「ビキニ事件の実相を伝える」、

※13時~ビキニ労災訴訟支援会結成総会